

「木坂の藻小屋」

長崎県対馬市

対馬は南北82km、東西18kmの細長い島で、海岸線は日本最大といわれるリアス式海岸から形成されている。全島の89%は山林に覆われ、耕地は3%、宅地は1%で、古代から現代に至るまで、食料自給が出来ない島としての宿命を負わされている。江戸時代、島民は農業に専従させられるが、食料の不足は常態的で、朝鮮からも米を買い入れて不足を補うほどであった。

このような狭隘で瘠せた土地から、より収穫を増すため海藻が肥料として使われ、それを収蔵する小屋も作られた。藻小屋は対馬の西海岸に偏在している。東海岸にくらべ地形が穏やかで可耕地が多かったからである。肥料にする海藻はホンダワラ、カジメなどで、海岸に打ち寄せられた海藻を採集した。不足の場合、あるいは販売を目的とする場合には舟で藻刈りを行った。採集又は根刈を行った海藻は自家の畑地に散布するか、余った海藻は天日に干して保管する。

藻小屋は浜磯の石を積み上げ、屋根で覆う。規模は自家の伝馬船が収納できる大きさに造る。別名「舟屋」と言うのもこのためである。

藻小屋の成り立ちについて詳しいことは分かっていない。江戸時代前期、海藻の採集権は給人（郷土）が独占していたが、中期頃から採集権は農民にも解放されるようになってきた。この頃から所有



青海地区藻小屋（現状）



木坂地区藻小屋（復元）

権を明確にするため、藻小屋が作られ始めたと推測される。しかし給人と農民層では土地の所有高が違い、自ら藻小屋の規模も違ってくる。一家で一戸又は数家で一戸の小屋、一家で二戸の小屋など様々である。

現在、海藻は肥料として使われることはなく、対馬沿岸は磯荒れにより、海藻は激減している。藻小屋は護岸区画整理等により撤去され、復元保存されたもの以外は、僅かにその形骸を止めるだけになっている。

みどころ



- 木坂海神神社
旧国幣中社（対馬一宮） ☎0920-83-0137
峰町ふるさと宝物館（海神神社伝世品を収蔵）
- 峰町歴史民族資料館：対馬の考古、歴史資料を見ることが出来る
☎0920-83-0151
- 円通寺：対馬の名刹 ☎0920 - 82 - 0270